

円と方による造形の研究 1

下山 肇

1. はじめに

本研究は単純な仕組みから、より豊かな空間を生み出すことを目指す造形研究から見えてきた、表現の方向性についての制作研究報告である。

「豊か」とは広辞苑¹によると「①満ち足りたさま。不足のないさま。(中略) ②ゆるやかなさま。のびのびとしたさま。(後略)」とあるが、ここではそこから拡げて、制約した少しの働きかけから多様な現象を生み出し、それを受けた人々の感情がプラスの方向へ動いて活性化されること、とした。

単純さをあらかずモチーフとして、幾何形体である「円」と「方(正方形)」を取り上げ、それらを単純な仕組み、すなわち「同じ」形、大きさ、リズムなど造形時の構成要素を極力減らした関係性によって展開した。そのうえで制約した少しの働きかけとして、自然現象の影響や作家の個性を消した造形の「純正」を追求するため、筆者本人の「手技」を排除し、専門業者やマシンとのコラボレーションによって具現化した。

2015年現在、作品1から作品9まで9作品を制作・発表しており、立体と平面によって展開した「仕組み」からの造形をとおして表現の四つの方向性が見えてきた。

2. 円と方について

実空間において、「円」は太陽や年輪など身近に数多く見られる反面、その循環性や永遠性からある種の神聖さも感じさせる図形である。一方「方」は、人が重力を感じることによって得られる上下の「垂直」感、そしてそこから派生する「水平」の空間認識に基づく、より触覚的な身体感覚に即した図形であろう。日本に目を向けてみても、この二つの図形は古来より装飾古墳の壁画モチーフとして繰り返し現れられており、また葛飾北斎が記した『略画早指南』²によれば、すべてのものは円と方の組み合わせによって表せるとし、造形の基本と位置づけられている。(Fig.1)

3. 作品

以下、制作時の時系列で作品実例を紹介する。

3-1. 作品1 『天に願い、地に祈る／Gaps in the Trihedral Figure』 (Fig.2)

最初のアプローチとして、二次元（図面）と三次元（立体）という二つの次元の狭間から生じる新しい空間の表現を試みた。第三角法³で表現される三つの図、「平面図、正面図、側面図」、そのどの図にも同じように描かれた「円」と「方」の関係を立体化することで現れる「相貫円柱」と呼ばれる立体を元に、普段目にしていながら気がつかない視覚による現実感と虚構感の隠されたギャップについて造形した。

■制作年：2011年

■発表場所：第75回新制作展（国立新美術館）

■サイズ：H252× W91.5× D75（cm）

■素材：ステンレス・スチール

3-2. 作品2 『マックスの足下から／Respect for M. Bill's "E.D.G.Z"』 (Fig.3)

「円」と「方」を三次元化し「円柱」と「立方体」をモチーフとした。立方体のとおりあう二面それぞれから、三つの円柱型を抜いた際に現れる「空間」自体の造形化を試みた。「空間=無い形」という抽象的な概念の実体化を目指した本作品は「円」と「方」による造形のひとつの基となった。また本研究テーマと同じような視点から数々の造形を創造したデザイナー、マックス・ビル⁴の立体作品、『三つの等しい円柱による緊密な構成』⁵へのオマージュにもなっている。(Fig.4)

■制作年：2012年

■発表：環境芸術学会第13回大会 作品発表（東海大学）など

■サイズ：H30× W30× D30（cm）

■素材：ステンレス

3-3. 作品3 『円と方／The Skeleton of the Form』 (Fig.5)

作品2で表現した「ヴォイド=くう」をさらに連ねることによって生じる、新たな「くう」の形体を追求した。その姿はまるで「形態の骨格」のように虚ろだが、立方体と円柱の単純な構成による秘められた図と地反転⁶の関係性を見いだせた時、パズルのピースがピッタリとはまるような、秩序の生まれるときに感じられる心の高揚が得られる。

■制作年：2013年

■発表：環境芸術学会第14回大会 作品発表（西日本工業大学）など

■サイズ：H32.5× W18× D18（cm）

■素材：ステンレス

3-4. 作品4 『円と方～ヤタガラス1／Yata-Garasu 1』 (Fig.6)

作品3での造形をさらに発展させ「ヴォイド=くう」のみを形体化しようと試みた。一つの立方体と三本の円柱の単純な組み合わせから生まれた「くう」が、人々の想像力を受け入れる「器」となる造形をめざした。「くう」は見えないゆえに謎をはらみ、謎は人々に思考するきっかけを与える。そして想像力を刺激し「くう=器」がその想像力で満たされた時、我々は未知なる

世界へ誘われる。

■制作年：2013年

■発表：環境芸術学会第14回大会 作品発表（西日本工業大学）など

■サイズ：H47× W18× D18（cm）

■素材：ステンレス

3-5. 作品5『円と方～ヤタガラス2／Yata-Garasu2』(Fig.7)

作品4のスケールを変化させることによって生じる空間感の変化について試みた。

■制作年：2014年

■発表：グループ展「内と外-宇宙とつながる視点編」（東京都 いたりや画廊）など

■サイズ：H36× W200× D36（cm）

■素材：スチール・OP 塗装仕上

3-6. 作品6『円と方／The Origin of Circle and Square』(Fig.8)

作品2をデザインする段階で制作した概念図を3Dモデル化し、通常の印刷では再現できない高彩度表現をジクレー⁷によって具現化した。

■制作年：2014年

■発表：グループ展「内と外-宇宙とつながる視点編」（東京都 いたりや画廊）など

■サイズ：H75× W75（cm）

■素材：ジクレー

3-7. 作品7『円と方～ヤタガラス展開／A Development of “Yata-Garasu”』(Fig.9)

作品4、5の制作工程から生じる「展開図」をそのまま平面表現として作品化した。作品6との対比となるよう、こちらもジクレーによって通常の印刷で再現できない低彩度表現を試みた。

■制作年：2014年

■発表：グループ展「内と外-宇宙とつながる視点編」（東京都 いたりや画廊）など

■サイズ：H75× W75（cm）

■素材：ジクレー

3-8. 作品8『円と方-育み-／Circles and Squares-The Image of Nurture』(Fig.10,11)

【背景】

兵庫県中央部・播磨地方の東側に位置する人口約4万人の内陸都市加東市。2006年に旧加東郡の社町、滝野町、東条町の三つの町が合併して新設された。合併に伴い2014年に新たな庁舎が新設され、筆者は市のシンボルとなるオブジェのデザインを依頼された。クライアントは地元のライオンズクラブで、オブジェは市役所新築の記念として寄贈されるものであった。

【コンセプト】

クライアントからは三つの町の合併都市ということから「三」をテーマにしたいという要望があった。そこで「三つ」の要素に意味付けをして、加東市が持つ「人・社会・自然」「産業・学

び・行政」「社町・滝野町・東条町（の合併）」「過去・現在・未来」などが有機的に組み合わせり「育まれていく」まちのイメージを形体化することにした。

いくつかのアイデアを提案したが結果、「円と方」シリーズを展開したアイデアが採用された。

円は「輪・和・環・縁」ともつながり、人々が仲良く「わ」になって「なごみ」、よい「えん」がめぐり「まわる」町であるように、また、方^{ほう}は「法・宝・訪」であり、「ほう＝秩序」ある生活と、自然や文化財、まつりなどの「たから」を活かし、様々な人々が「おとずれる」活気ある町であるように、という思いを込めた。

【造作について】

三つのキューブが回転しながら積上っていく基本形体に、下部から、一、二、三と徐々に円柱の抜きが増えていくことで成長する様を表した。

さらに、作品2、3、4の制作・発表時には実現出来なかった、面による仕上げの変化を試み、円柱によって切り抜かれた部分を「鏡面」に、それ以外を「バイブレーション仕上げ」とした。鏡面部は周りの風景や光を凝縮させ、同じ仕上げでは得られなかった視覚的な豊かさが生じた。

【まとめ】

納めたオブジェはクライアントなどから好評価を受け、庁舎竣工式では大々的な除幕も行われた。また新聞等メディアにも複数取り上げられることとなり、スケールや人々におよぶ豊かさの規模では本テーマでの最大の成果ともなった。

■制作年：2014年

■発表：公共施設屋外オブジェ（兵庫県加東市役所）

■サイズ：H302× W85× D98（cm）

■素材：ステンレス バイブレーション仕上げ、一部鏡面仕上げ

3-9. 作品9『円と方—ダルマキューブ—/Three Daruma Cubes』（Fig.12）

作品2、3で見立てられた「器」としての造形の試みをより具体的に展開した。スケールを変え、モチーフとして群馬県高崎市の伝統工芸「だるま」を取り上げて、その伝統技法との融合を試みた。

■制作年：2014年

■発表：第78回新制作展（国立新美術館）など

■サイズ：H75× W231× D75（cm）

■素材：スチール・OP 塗装仕上げ、一部

4. 表現の四つの方向性（Fig.13）

一連の単純な仕組みからの造形表現を追求することで、必然的にそれと対比される表現があぶり出されてきた。そして表現の追求には以下四つの方向性があると考えに至った。

一つ目は、超絶技法を追求する「技」による表現。二つ目は、思いや考えによる「コンセプト」による表現。三つ目は、原初的な感性から生じる「プリミティブ」な表現。そして最後に本

研究、単純さから豊かさを生む必然的な「仕組み」からなる表現である。必然的な仕組みからの表現は「理⁸」となり、表現が満たされた瞬間、宇宙の真理を刹那的に垣間見ることにもつながっていく。筆者はこの「理」からの表現に強く惹かれるものである。この四つの方向性はどれかが正しいというのではなく、制作者自身の選択にゆだねられ、またバランスを持って組み合わせられていくのであろう。

5. まとめと今後の展望

「理」の表現は、シンプルが故に力強さを生じさせる。また表現そのものが主張するのではなく、第三者の想像力やアイデンティティを受け入れる「器」ともなりえる。しかしその反面、ともするとオリジナリティを損なわせ、匿名性を感じさせる退屈なものとなる危険性もはらんでいる。このことは2015年に話題となった2020年東京オリンピックエンブレム盗作問題⁹からも感じられることである。しかし、いかにシンプルにそぎおとした表現をしようとも、所詮表現者は個人であるがゆえ、消そうとしてもにじみ出てきてしまう「個」の存在感にこそ表現足り得るものがあるのではないだろうか。この匿名性を追求した「理」からの表現の先に、真の「豊かさ」も生じてくるであろうと信じ、今後もこの方法論での造形研究を進めていく所存である。

[図版]

Fig.1 葛飾北斎 永田生慈 著『北斎の絵手本①』岩崎美術社 1986年 P.97

Fig.4 Edouard Huettinger “Max Bill” abc edition 1978 P.162

Fig.2~3, 5~13 撮影・作成 下山肇

註

- 1 新村出編『広辞苑 第四版』岩波書店 1991年 P.2618
- 2 序に「丈山尺樹寸馬豆人などいへる画に ことごとくその法あり されど起る処は方圓を出ず」とある。葛飾北斎 永田生慈 著『北斎の絵手本①』岩崎美術社 1986年 P.85
- 3 第三角法は、立体物を平面で表す場合に用いられる正投影図法の一つで、正面図・平面図・側面図の三面図で構成される。
- 4 マックス・ビル／Max Bill 1908年-1994年。スイス生。「緻密な数学的計算にもとづいていながらも、それを気づかせない、いわば“数学・幾何学の詩”とも言うべきものが、その造形をつつみこんでいる。自然の影響を排して数学的真実に立脚した美を追求する“コンクリート・アート（具体芸術）”を提唱し、実践していった。」<http://www.praemiumimperiale.org/ja/laureate/laureates/item/112-bill> 2015年10月閲覧
- 5 『三つの等しい円柱による緊密な構成』マックス・ビル作 1966年
- 6 多数の多義図形の基礎となる現象。藤永保・仲真紀子監修『心理学事典』丸善株式会社 2004年 P.368
- 7 【Giclee】 デジタルで版を作り高精彩出力された美術品レベルの印刷物の総称。
- 8 【理】 ことわり ④当然のこと。もっともなこと。新村出編『広辞苑 第四版』岩波書店 1991年 P.953
【理】り ④普遍的な絶対・平等の真理・理法。⑤中国哲学で宇宙の本体。新村出編『広辞苑 第四版』岩波書店 1991年 P.2676
- 9 1964年東京オリンピックで亀倉雄策氏のデザインしたエンブレムへのオマージュとして、アルファベット「T」と幾何形体によってデザインされた。そのシンプルな構成ゆえデンマークの劇場ロゴマークと酷似していたため盗作ではないかと大きな問題となった。



Fig.1 葛飾北斎 ^{りやくが はやおしえ}『略画早指南』より



Fig.2 作品1 『天に願い、地に祈る／Gaps in the Trihedral Figure』



Fig.3 作品2 『マックスの足下から／Respect for M. Bill's "E.D.G.Z"』

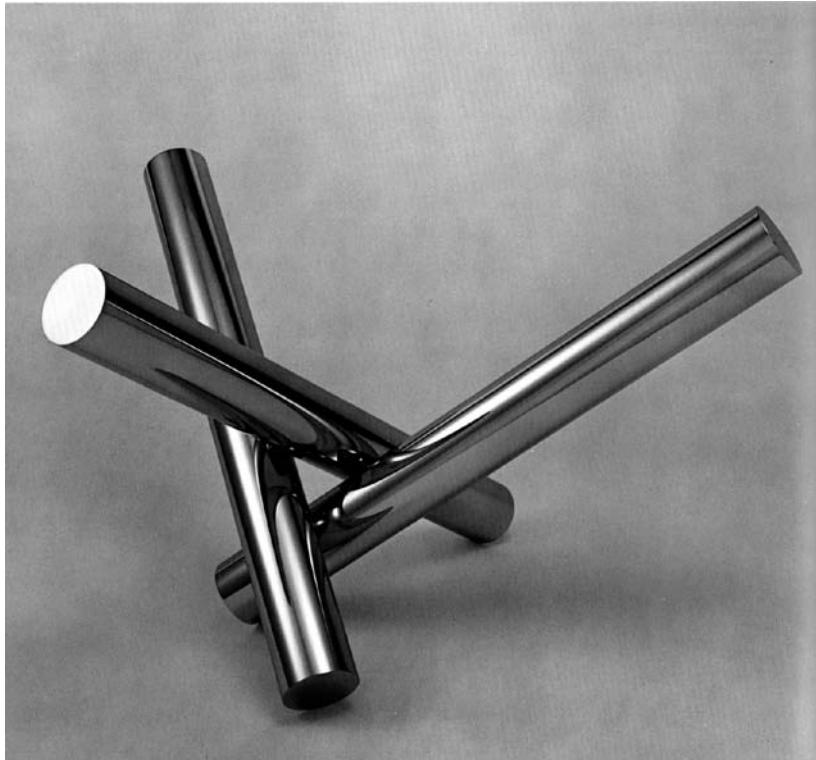


Fig.4 『三つの等しい円柱による緊密な構成』 マックス・ビル作1966年



Fig.5 作品3 『円と方／The Skeleton of the Form』



Fig.6 作品4 『円と方～ヤタガラス1／Yata-Garasu 1』



Fig.7 作品5 『円と方～ヤタガラス2／Yata-Garasu 2』



Fig.8 作品6 『円と方／The Origin of Circle and Square』



Fig.9 作品7 『円と方～ヤタガラス展開／A Development of “Yata-Garasu”』



Fig.10 作品8 『円と方—育み—/Circles and Squares-The Image of Nurture』



Fig.11 作品8 『円と方—育み—/Circles and Squares-The Image of Nurture』



Fig.12 作品9 『円と方—ダルマキューブ—/Three Daruma Cubes』

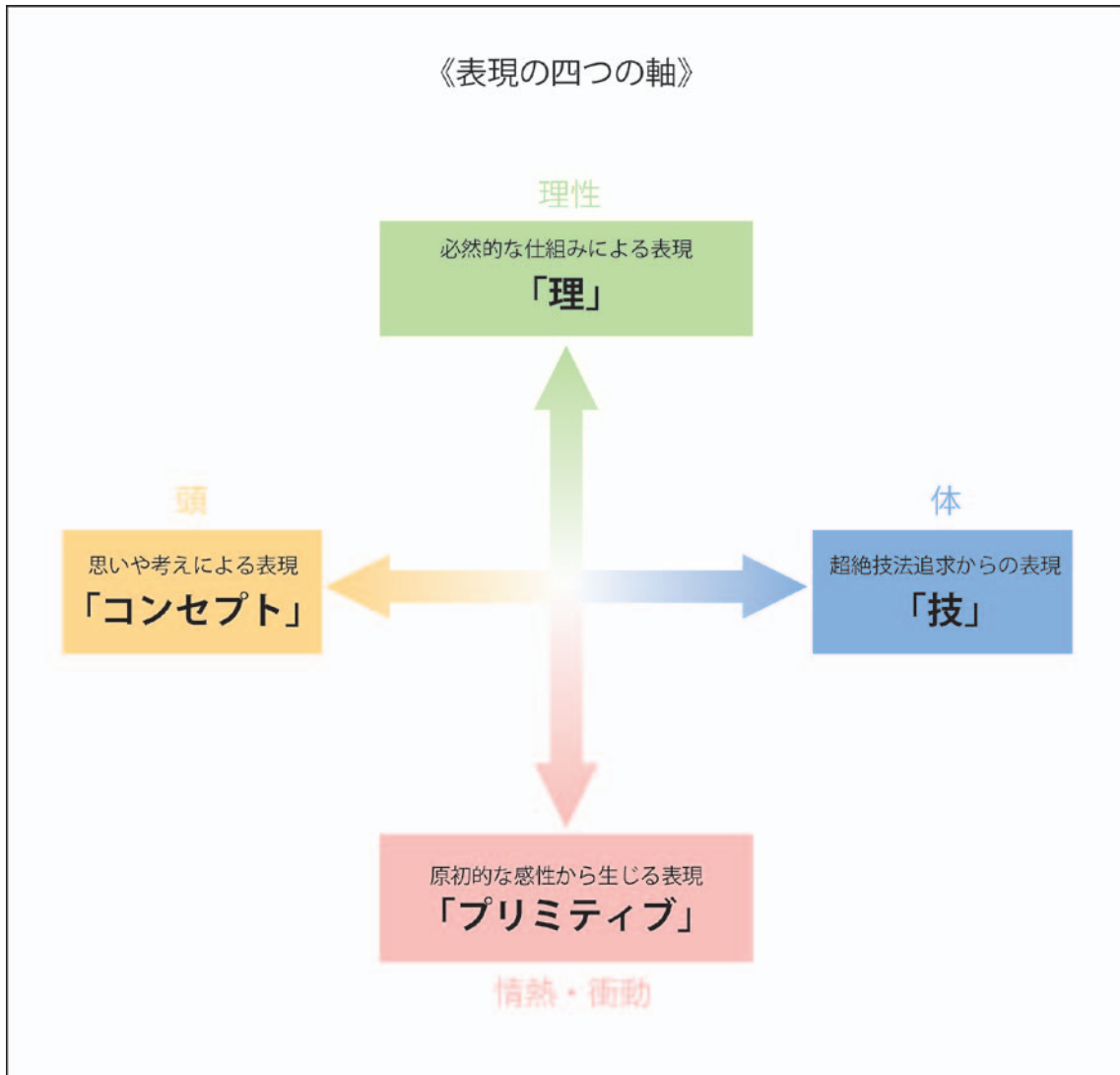


Fig.13 表現の四つの方向性